

# 諸磯b式土器に付けられたイノシシ顔

—— 装飾の意味を考える ——

関 根 慎 二

1. はじめに

2. 獣面土器の分類と時期分類

3. 分布と出土傾向

4. まとめ

## —— 論文要旨 ——

縄文時代前期は、それ以前と比較し様々な点で、文化の変革点としてとらえることが出来る。縄文時代の土器文様の大部分は、抽象的な文様である。木葉文形浅鉢といわれる土器は、抽象的な文様装飾を持ち威信財として使われた。しかしこれとは別に、具象的な文様装飾を持つ土器もある。すなわち、諸磯b式土器に付けられるイノシシ顔の突起である。このイノシシの付いた土器は、具象的な文様でありながら、装飾の意味について考察されることは、少なかった。本論では、威信財としての位置づけが確立された浅鉢と対置することで、イノシシの付いた土器解釈を試みる。

イノシシ顔の付いた土器を分析するために次のような方法を採用した。

まず、イノシシ顔の分類と時期区分を行い時間差を求める。次に分布域と主な遺跡からの出土量を浅鉢とイノシシ顔の土器について比較する。このことによって、地域差や遺跡間による差異を求める。最後に、遺跡の出土状況を浅鉢との対比の中で確認する。

以上の方法とは別に、黒曜石の流通過程の研究成果を参考にした。これらのことから、イノシシ顔の付いた土器は、諸磯b式土器文化圏における【小地域集団を証明 (identity)】するための【威信財 (prestige goods)】としての役割を持った土器と位置づけた。

### キーワード

対象時代 縄文時代前期後半

対象地域 関東・中部高地

研究対象 土器文様装飾 存在証明 威信財

## 1. はじめに

縄文時代に獣面把手と呼ばれる突起の付いた土器は、前期以降の深鉢などに付けられる装飾としてみられるものである。縄文土器の文様は、抽象的な文様が多く具象的な文様が少ない。その中で、獣面の装飾は、数少ない具象的な文様であることから、比較的目に付く文様装飾である。本稿では、その具象的な文様の出現期である諸磯b式土器に付けられたイノシシ顔の把手について考察してみたい。

先に、筆者は諸磯式にみられるイノシシ顔の付いた土器について、獣面把手の施文手法の違いから、分類変遷をおこなった。その変遷は、次のようになる。諸磯b3段階のイノシシ顔は、口縁部の文様モチーフから別個に独立して付けられていた。第4段階以降になると、次第に口縁部文様モチーフに組み入れられるようになる。第5段階では、再び口縁部文様とは別個に文様モチーフと独立した形で貼付されるようになった。第5段階以降イノシシ顔は、粘土瘤状の貼付による突起が主体となり、イノシシ顔は消滅する。この第5段階以降になると粘土瘤を貼付した深鉢土器が数多くみられる。諸磯b5段階、諸磯b6段階を経て諸磯cに至るところで、イノシシ顔の把手から粘土瘤へと変わっていった。

同じ諸磯b式土器の時期、もう一つの特異な土器がみられる。それは、有孔浅鉢と言われる形が、宇宙SFに出てくるような「UFO」に似た浅鉢である。この土器については、酒造具説や太鼓説などがある。しかしこの土器の用途については、今ひとつ確定的ではないが、葬送儀礼や廃屋儀礼などの儀式を行う場での威信財に使われていたことを小杉氏（2003）は指摘している。

では、イノシシ顔の突起についても威信財としての役割が考えられないだろうか。現代人にとって、縄文土器に装飾された文様モチーフの意味を解釈するのは難しいことである。しかし、いろいろな文様の意味を解釈する以前に、土器文様の物語を作る行為があったことは遺物を通して理解できることである。縄文人が諸磯b式から諸磯c式へと移行する中で、深鉢に付けられた具象性を持つイノシシ顔の突起から抽象的な粘土瘤突起へと変化させたのは、単に装飾を簡略化させた結果ではないと考える。それは、ある「もの」を入れる特別な容器として使われた深鉢に付けなくてはならないもの—イノシシ顔—から、容器に貼付しなくてはならないもの—粘土瘤—へと装飾の意味を変化させていった。始め、土器に付けられたイノシシ顔把手には、深鉢に付ける意味を持ち所作があった。それが世代を交代するとともに、装飾の意味を理解しつつも形を変え、本来の持っていた意味から離れ、深鉢に粘土瘤を貼付する行為が形だけ残った結果ではないだろうか。浅鉢が諸磯b式から諸磯c式の始めにかけて、比較的長期間安定した使われ方をする状況

が認められる。浅鉢が、威信財として確固たる位置づけがされる状況にある中で、イノシシ顔の把手は、変化の度合いが早く出土状況から威信財として認められないでいた。

今回は、この浅鉢の直接的な用途とはいったん離れ、儀式として使用される威信財としての浅鉢をイノシシ顔の把手と比較する材料としてみていくことにしたい。

イノシシ顔の突起と浅鉢の分布状況や出土数、出土状況の具体的な例をみながら、イノシシ顔の突起についての物語。もう一つの威信財になりえるか、可能性を考えてみたい。

## 2. 獣面土器の分類と時期分類

本項では、時間軸をまず決めることとして、諸磯b式土器の変遷図に沿って獣面土器を並べてみる。諸磯b式土器の変遷については、第12回縄文セミナーによる変遷過程を使用する。それにあわせて獣面（イノシシ顔）の変遷をみてみたい。土器と獣面の分類変遷については、先に詳細を述べているが、概略を紹介する（図1参照）。

**諸磯a式土器終末段階（諸磯bの前段階）** この段階の土器の主な文様のモチーフは、円形の刺突肋骨文、波状文、木葉文。幅狭な半截竹管で平行沈線、爪形文で肋骨文や波状文、木葉文の文様を描いていく。円形刺突はやや太めの竹管を使用し、円形の刺突を、先に縦に区画し肋骨文、波状文を横につないでいく文様施文の土器。

浅鉢は、ボール型の土器。竹管による円形の刺突を横に沈線をつないでいく。基本的に深鉢に似た模様を浅鉢にも付けていく。

**諸磯b1段階（諸磯b初頭段階）** 文様構成は、諸磯aに非常に似ている。大きな違いは、諸磯aの場合、円形の刺突で縦に区画してから横に波状線をつないでいく、が円形の刺突が先に横に波状を描いてから、後で円形の刺突を付けて縦に区画したようにみせている。また、半截竹管による施文が幅広くなる。土器文様施文方法の違いという所でaとbを分けた。

**諸磯b2段階（諸磯b古段階）** 懸架状の入組文。文様モチーフも若干木葉文から発展したような形の模様。幅の広い爪形文。確実に施文具が幅広の爪形文に変わってくる。爪形文の土器と平行沈線文の土器と浮線文の土器が出てくる。この爪形文土器の中に、爪形文と爪形文の間に浮線文を思わせる隆起した線がある。この段階に獣面把手、浮線文土器の発生がみられる。

浅鉢の文様も爪形文で木葉文を描き、諸磯a式土器を思わせるモチーフを持つ。

**諸磯b3段階（諸磯b中段階）** 浮線文と沈線文の施文の土器が主体。文様は口縁部に同心円や渦巻きの文様を描いていく。この段階は、獣面把手が確立してくる段階。胴部文様帯が多段化してくる。口縁部文様帯も前の

段階に比べてやや狭くなり、口縁部以下の文様帯も横の浮線や沈線で多段化されてくる。文様の方も同心円や渦巻文などが入ってくる。

浅鉢は、口縁部がかなり丸くきつくなるような形で、沈線に刺突を加えたようなもので渦巻き、無文も顔料を塗り、彩色して文様を描いていく。

**諸磯b 4段階（諸磯中段階）** 文様は沈線と浮線が主体になる。口縁部の文様に入組の弧線や風車状の弧線が描かれ、波状口縁の突起の下に入組状の文様が描かれる。文様が突起や波頂部のところでぶつ切りになっていくような形が、この時期の特徴である。

浅鉢は、無文化していく。無文の器面に、顔料により文様が描かれる。

**諸磯b 5段階（諸磯b新段階）** 浮線が前の段階では断面が丸く隆起しているのに対して、扁平になってくる。

口縁の器形が靴先状になり、大きく屈曲する。口縁部の文様も大きく屈曲した外反している部分に文様が描かれる。波頂部からつながるように、対の弧線になるような線が描かれていく。くの字に屈曲した上と下の部分に文様を分帯して、上の段と下の段の外反した部分の両方に、同じような文様を描いていく。

浅鉢は、比較的口縁が立ち、肩部の所に屈曲が出来るというような形が多い。

**諸磯b式6段階（諸磯c移行段階）** 靴先状の口縁が肥大化。口縁部に小さな屈曲を持って粘土紐が縦に付けられる土器。入組状の沈線で描かれているような土器。

浅鉢は、基本的に無文の土器。段がなくなって口縁直下の肩部に円形の刺突が押されてくる。

諸磯b式の獣面について、深鉢に付けられる方法により6類に分類した。これらの分類は、諸磯b式土器の細分型式に緩やかに対応する関係を持っている。

獣面装飾が、諸磯b式土器に装飾される変遷過程と、深鉢の変遷過程についての関係を示すと、次のような変遷が認められる。

**1類** 獣面は、頭部、目鼻を器面の側面に貼付装飾し、強調する形態。獣面は口縁部文様帯に組み入れられる。口縁部からあまり突出しない。深鉢の器形は、口縁部が大きく開く。口縁部文様帯は、広い一段構成をする。爪形文施文の土器に付けられ獣面土器の初源的なものである。

**2類** 獣面が把手化し、より具象化する。成形された獣面全体を口唇部の上に載せ、把手化する。本類では、口縁部文様帯の文様モチーフは獣面とは、別個のモチーフを作る。そのため、獣面部をのぞいても口縁部も尿対の文様モチーフは完結している。深鉢口縁部の器形は、緩く内彎。口縁部文様体は、広い一段構成、口唇部に平行線が引かれる。

**3類** 獣面の半把手化と、口縁部文様モチーフへの組

み込み。成形した獣面の頭部を口唇部に貼り付け、目・鼻・口に当たる部分は、口縁部側面に貼付する形態。獣面頭部が、波状口縁の波頂部突起となるようにしている。口縁部文様帯は、獣面土器の貼付が取り入れられたモチーフになる。口縁部は、キャリパー状に内彎。口縁部文様帯は、口唇に沿って幅の狭い文様帯を持つ。多段化の傾向を持つ。

**4類** 獣面が側面に付けられ、扁平化する。獣面全体を口縁部側面に貼付する形態。頭部は、口縁波頂部の成形と一体になる。顔面部は、ボタン状粘土瘤により目、鼻、口を表現している。獣面の輪郭を浮線や沈線で描くことで、口縁部文様体に取り入れ、一体化されている。キャリパー状の鋭角な口縁。口縁部文様帯が多段化する。

**5類** 獣面の輪郭喪失。口縁部文様体の文様モチーフのなかに組み込まれた粘土瘤の突起としての認識が強くなる。口縁部文様帯モチーフと遊離したかたちで貼付される。口縁部は、キャリパー状の鋭角な屈曲を持つ。口縁部文様帯は多段化する。

**6類** 獣面の抽象化と文様モチーフとの隔絶。獣面が完全に退化し、口縁波頂部の側縁に大きめの粘土瘤を貼付する形態。

以上、土器の変遷と獣面土器の分類を主に形態と施文方法とから分けてみた。

1類から4類の獣面土器は、その貼付される深鉢の文様形態からほぼ諸磯b式古段階から中段階への変遷に緩やかに対応している。6類は、深鉢の中段階から新段階にみられる土器に貼付されている。2類や3類の獣面土器と同じ時期の深鉢に6類の獣面土器が貼付される例もある。諸磯b式の新段階では、1類～4類の土器が貼付される例がみあたらないことから、6類はb<sub>2</sub>～b<sub>3</sub>段階に出現し、これらの深鉢に伴いながら新しい段階にまで残っていったものと考えられる。

### 3. 分布と出土傾向

図2は、諸磯b式土器と、獣面土器、浅鉢の広がりを見るための図で、細かく集成したものではないが、およその傾向を示すものと思われる。諸磯b式土器が出土する遺跡のうち、獣面土器と浅鉢の出土する遺跡、浅鉢の出土する遺跡を示した。獣面土器と浅鉢の分布は、ほぼ諸磯b式土器が分布している範囲と重なるが、獣面土器の分布がやや内輪になる。

獣面土器、浅鉢とも筆者の調べた範囲では、東北地方大木式土器文化圏の山形、西日本では北白川式土器文化圏の岐阜にまで広がっている。さらに今後外側に広がる可能性はあると考える。各遺跡の出土状況を見ると、獣面土器は確認されないが、浅鉢の出土が確認された遺跡がみられた。特に西日本では、浅鉢の出土遺跡が獣面土器より遠方にあり、遺跡数も多い。また、甲信地方でも、

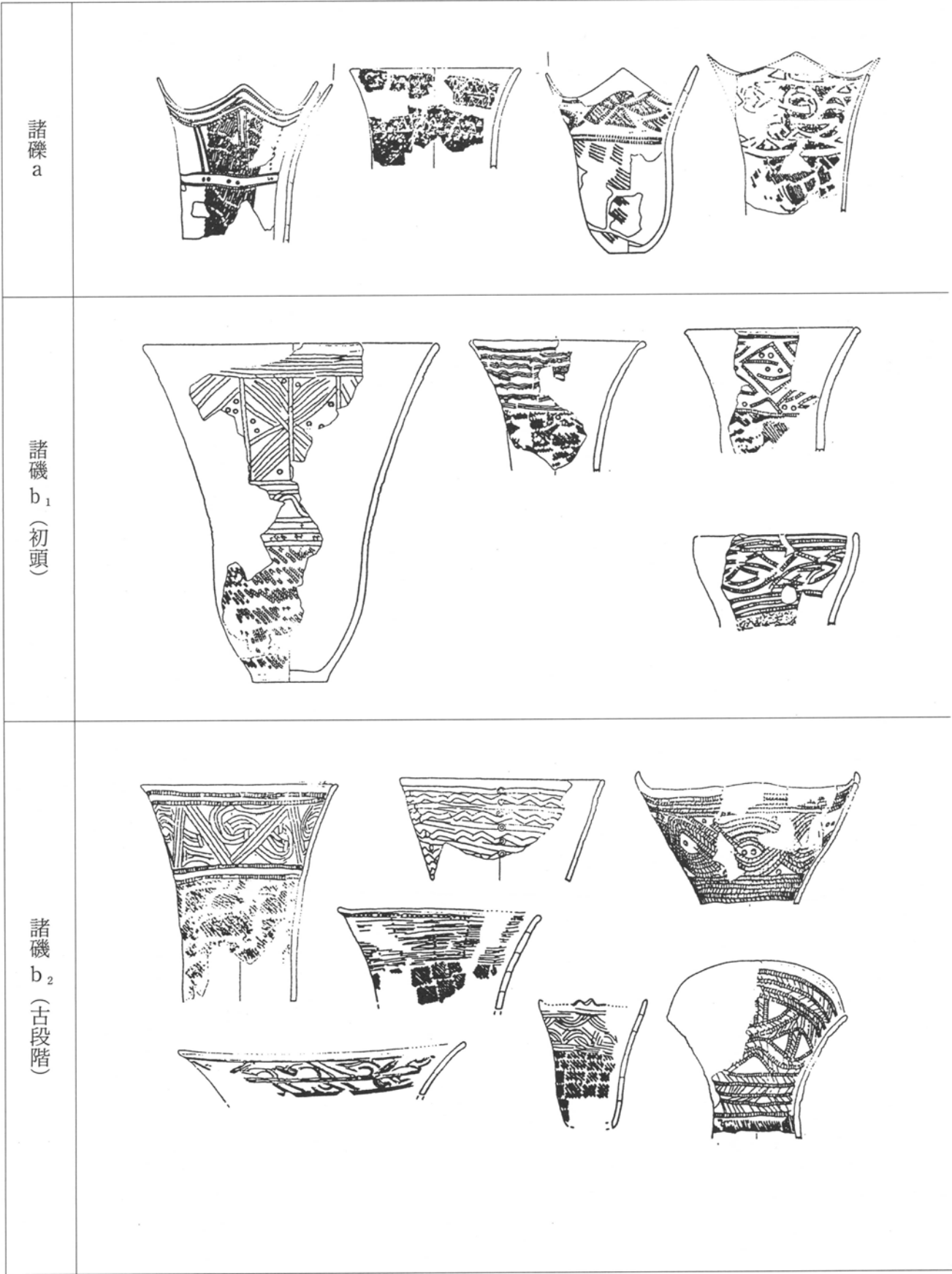


図1-1 諸磯b式土器変遷図



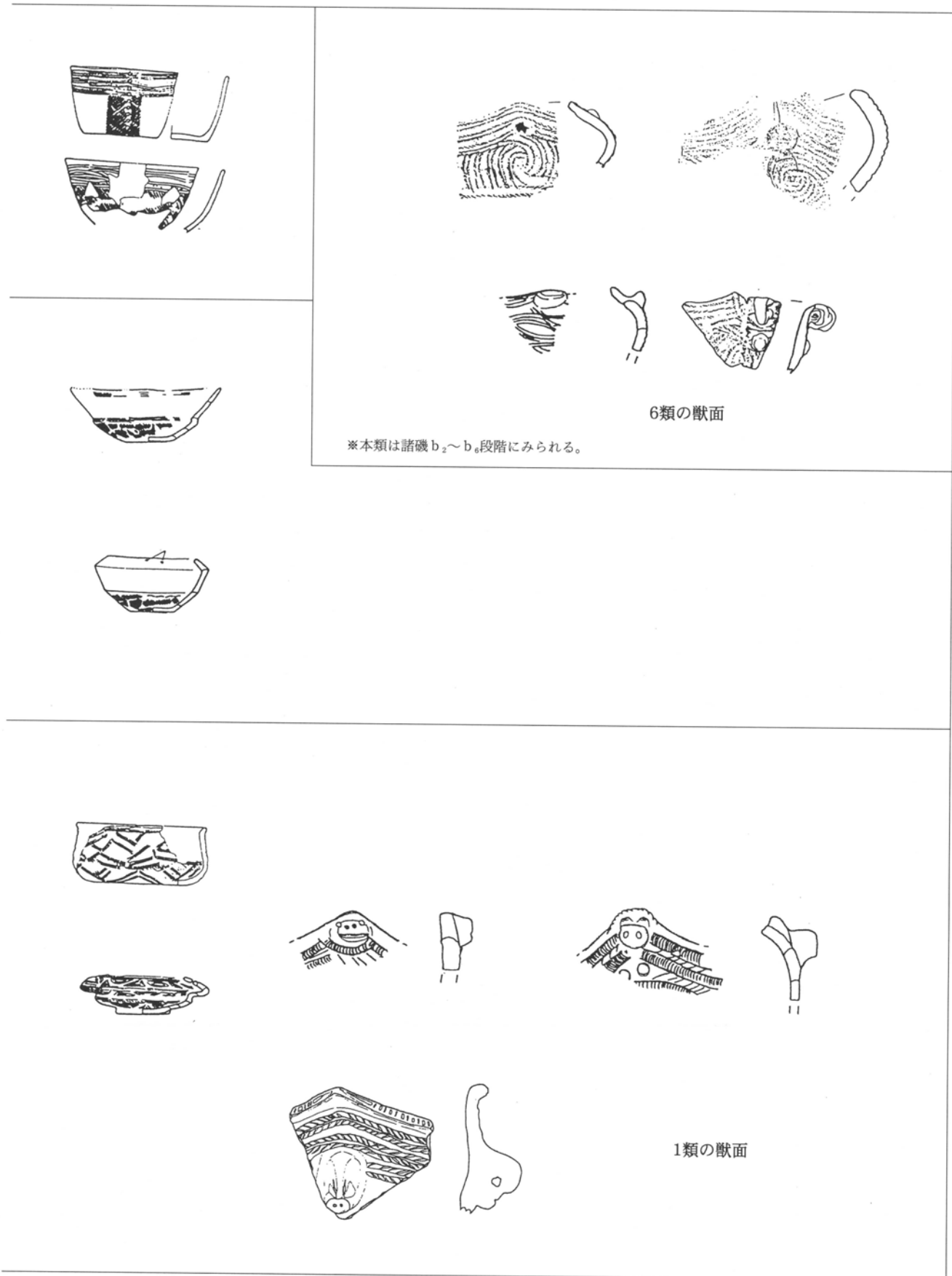


図1-1



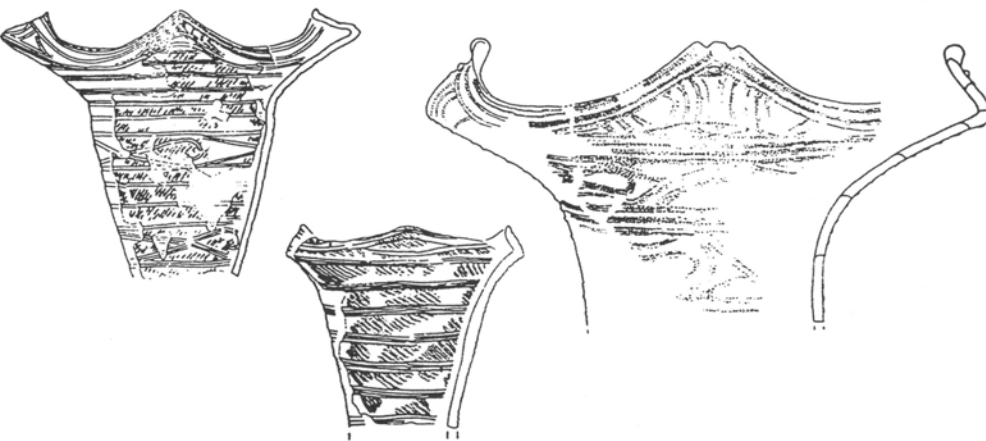
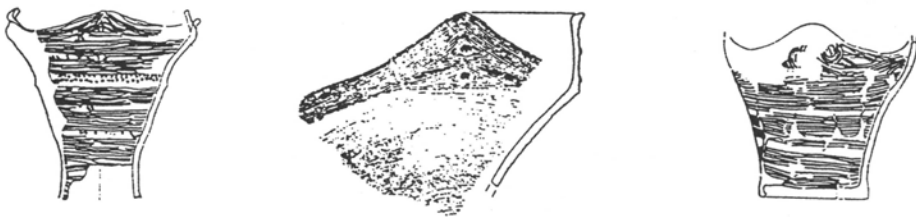
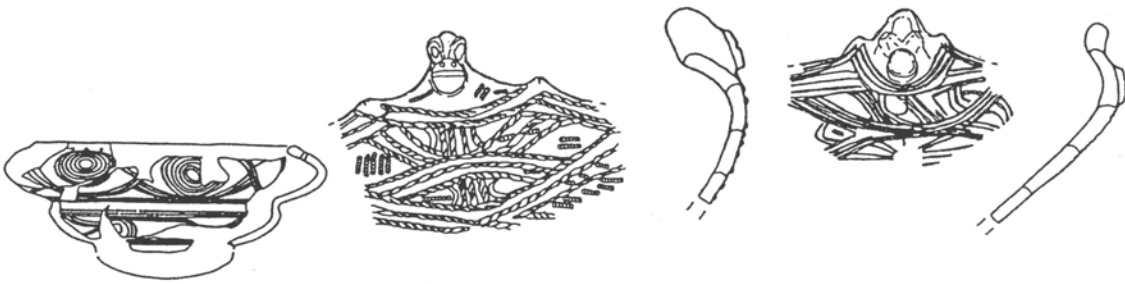
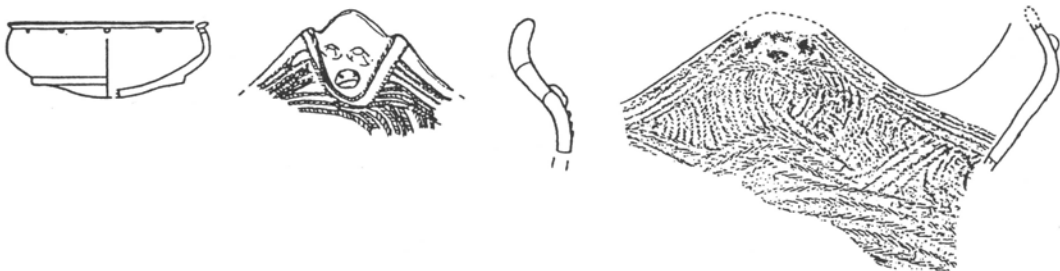
諸磯 b <sub>3</sub> (中 <sub>1</sub> 段階)	
諸磯 b <sub>4</sub> (中 <sub>2</sub> 段階)	
諸磯 b <sub>5</sub> (新段階)	
諸磯 b <sub>6</sub> c	

図1－2 諸磯b式土器変遷図



2類の獣面

3類の獣面



4類の獣面

5類の獣面

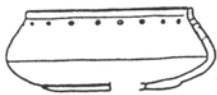
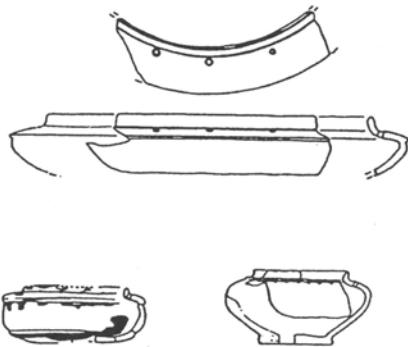


図1-2

浅鉢の出土する遺跡は多いが、獣面土器の出土する遺跡は少ない。関東では、獣面土器と浅鉢の両方出土する遺跡が多いなど、地域的な傾向がみられる。このことは、獣面と浅鉢において、土器の作られた数量的な差異と機能・用途による違いが考えられる。

次にいくつかの遺跡において獣面土器と浅鉢の出土比率をみてみたい。

今回集計した遺跡は、諸磯期の一部の遺跡であるが、ここから獣面土器のおおまかな傾向をみてみたい。

地域的な分類では、諸磯式土器の分布域の北部である群馬地域、中心部の東京・埼玉、浮島系土器と接する東部の千葉、西部の神奈川、西北部に位置する中部高地の山梨・長野、北白川式土器と接する岐阜県の遺跡を取り上げた。

表1・図3は、各報告書の図版に掲載されているものを数えた数量である。数量化した遺構と遺構外の遺物は、報告書中の諸磯b式期前後の遺構である。だいたい本論の諸磯b式土器の変遷図に相当する時期である。獣面土器は、廃棄された状態で出土することが多いので、諸磯b式土器期より古い遺構から出土している場合があるため、実際に獣面土器が制作された時期より幅をとって数えた。

報告書掲載の遺物は、当然のことながら出土遺物の全部を掲載しているわけではない。また、土器片の大小があり、正確な数量とはならないと思われるが、報告書の掲載された土器片全体の中で数量比とすることで、各報告書（遺跡）内における獣面と浅鉢の数量比は保証され则认为る。

**神保植松遺跡** 当該期の住居址は4軒確認されている。26号住居址遺構では、3類、4類の獣面土器が8点と比較的多く出土している。この住居址は、他の住居址に比べ出土土器量や規模が大きいものである。その他の遺構からの出土は少ない。遺構外からは、1類から6類の獣面土器が多く出土している。遺構、遺構外を合わせた全体数をみると、獣面土器と浅鉢の出土比率はほぼ同じになる。

**中野谷松原遺跡** 該当する住居址は、48軒で今回調査した遺跡の中で最も多かった。本遺跡からは、1類から6類の獣面土器の出土がみられた。特に66、80号住居址はまとまって出土している。これらの遺構は、他の遺物についても遺跡全体からみた遺物出土量も多くなっている。また、遺物出土量の多い遺構としては、56、78号住居址がある。これらの遺構からも獣面土器は、出土している。土壌出土の獣面土器と浅鉢の比率をみると浅鉢が多くなっているが、これは、土壌に副葬品として浅鉢が使用された例外が多いからである。中野谷松原遺跡全体での獣面土器と浅鉢との比較では、ほぼ同じ比率になっている。

**塚屋遺跡** 本遺跡は、諸磯a式期から続く遺跡である。該当する10軒の住居址と土壌、遺構外出土遺物を数えた。2類、3類の獣面土器が21、24号住居址から2点出土している他は、浅鉢の数量が多い。4号土壌から4点出土していることは、特筆される。他に5類、6類の獣面土器の出土があった。塚屋遺跡全体では、獣面土器より浅鉢が多く出土している。

**四葉地区遺跡群** 該当する住居址10軒について数えた。1号住居址は、遺物の出土量規模とも本遺跡中最大規模のものであった。本住居址からは、2類～4類、6類の獣面土器17点が出土している。他には、10・11号住居址からと遺構外から出土した2点が確認された。1号住居址からは、浅鉢も59点出土しており、他の住居址と比較した場合突出している。遺跡全体から出土した獣面土器と浅鉢の数量比は、浅鉢が多くなっている。

**花前遺跡** 諸磯期の住居址からは、2類の獣面土器が出土している。獣面土器と浅鉢の比率はほぼ同じである。遺構外から出土している浅鉢の比率は、獣面土器の3倍ほどである。全体では、1：2の割合になる。本遺跡は、浮島式土器文化圏内に入る遺跡であり主体となる土器は浮島式土器である。ちなみに浮島式土器と諸磯式土器の比率は、7号住居では2：3であるが、本住居址の帰属時期は黒浜式期である。諸磯式期の21号住居では、8：1になる。

**木戸先遺跡** 諸磯期の住居址からは、2類の獣面土器が出土している。7・8号住居址は遺物が一緒に掲載されているため分離できなかったが、2軒の住居から2類の獣面土器が出土している。浅鉢も出土しており、獣面土器と浅鉢の比率は1：2である。土壌を含めた包含層では、2類～3類の獣面土器が出土している。包含層と土壌出土の遺物は一括して数えた。そのため浅鉢は、土壌に副葬品として出土した物が多いため、数が多くなっている。

**細田遺跡** 遺構の出土傾向は、図示された数量では獣面土器と浅鉢の数量比はほぼ同じである。報告書には、別に出土土器一覧表が掲載されており、その中に、獣面土器の数量は示されていないが、浅鉢の数量が示されている。これと、図示された獣面土器との比較を行うと浅鉢の比率が圧倒的に多い。5号住居址では図示されたものは獣面土器1片、浅鉢1片であるが、報告書の集計表によると12片出土している。さらに北白川式土器が片個出土している。

**お供平遺跡** 獣面土器の出土した住居址は少ない。土壌や遺構外からのものを合わせて浅鉢と数量を比較すると圧倒的に浅鉢の出土比率が多いことがわかる。出土した獣面土器は、5類のものが多く、土壌から3類の獣面土器が出土している。

**天神遺跡** 報告書の出土遺物図版とは別項に獣面土器

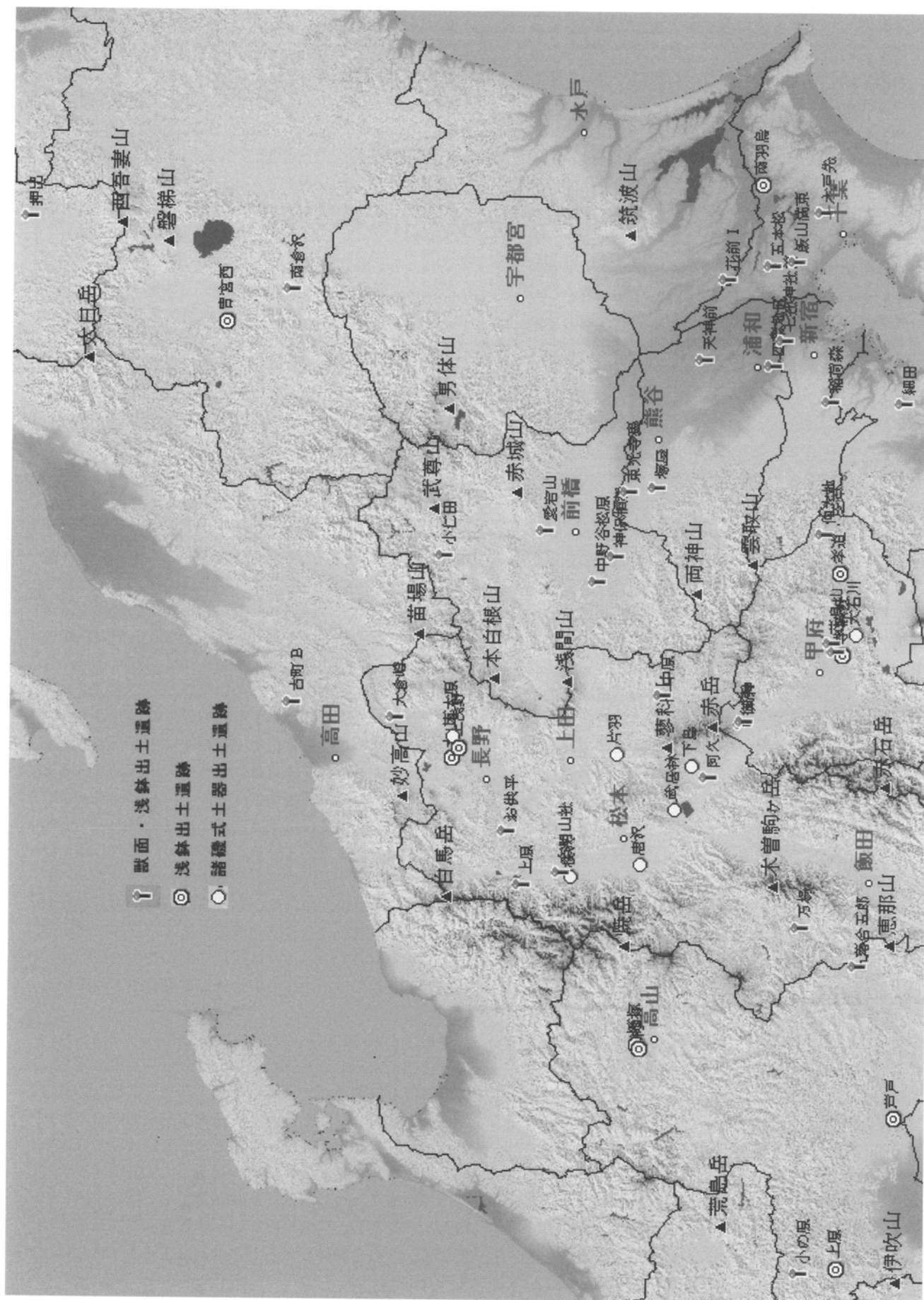


図2 獣面土器分布図

が掲載されておりそれらを含めて数えた。各遺構の掲載土器量が少ないこともあり比率的には高くなる傾向にあるが、実数では多く出土していない。報告では、2類から6類の獣面土器の出土がみられたが、1類～4類より、5、6類の出土量が多い。獣面土器に比べ、浅鉢の比率が多くなっている。

**落合五郎遺跡** 北白川式土器の多く分布する地域の遺跡である。遺構内からは、北白川式系土器の出土比率が多いためなのか、獣面土器の出土はみられなかった。遺構外から数点出土している。浅鉢との比率をみてみると10倍以上の差異がみられた。北白川系の土器が多い地域において浅鉢の出土数は、他地域と同じような傾向を示すが、獣面土器の出土比率は少ない傾向にあるといえる。

以上、獣面土器の出土する遺跡を大まかな範囲でとらえた。

獣面土器の出土数では、群馬県西部地域の遺跡に集中してみられた。また、四葉遺跡群や木戸先遺跡などでは獣面土器の多く出土する遺構は、遺跡の中でも規模が大きく遺構内出土の遺物数が多く出土する遺構であるということがみてとれた。

獣面土器の時間的な広がりでは、神保植松遺跡や中野谷松原遺跡では、第一段階から第六段階までの獣面土器が出土しているのに対して、その他の地域の遺跡では、偏った段階のものが出土する傾向にある。

浅鉢との出土量比較では、神保植松遺跡や中野谷松原遺跡ではほぼ同じ比率で出土しているのに対して、他の遺跡では、浅鉢の出土比率が高いことがわかった。

次に獣面土器と浅鉢の出土状況の違いをみてみたい。

図4・写真1は、浅鉢が遺構に伴い出土している例である。

群馬県利根郡昭和村糸井宮前遺跡78号住居では、住居床面に摩滅し凹部に穴のあいた石皿と共に浅鉢が伏せられた状態で出土した。石皿が粉引きの道具であることから、食糧に関する行為を連想させる。あるいは、住居の廃絶時に、その役目の終わった石皿と共に再生を願うために、何らかの儀礼的な行為を行い埋設されたものと考えられる。

安中市中野谷松原遺跡(図5)では、諸磯b式期の集落と共に、多くの土壌墓が発見された。土壌墓は、副葬品を持たないものが大半であるが、副葬品を持つ土壌墓での割合は、装飾品や石器、深鉢などと比較して浅鉢の埋設されている割合が一番多い。また、千葉県木戸先遺跡(図6)では、報告によると墓壙から浅鉢が出土しており、埋葬に伴う副葬品と考えられている。

土壌から出土する浅鉢のこのような出土例をみると、葬られる人の特殊技能、あるいは身分的な関連性から、葬送儀礼用の土器として浅鉢が使われていたことを出土状況が示しているのではないだろうか。

以上の例のように、浅鉢形土器がなんらかの儀礼にともなう場面で使用される性格のものであると考えられる。これは、煮炊きや貯蔵などに用いられた深鉢形土器とは対照的なもので、いわゆる第二の道具という概念で表現されるものである。

一方、獣面土器の出土状況をみると、住居覆土或いは、遺構外から獣面の部分破片が出土することが多い。まれに、獣面の付いたほぼ完形の深鉢が住居址から出土することもあるが、完全に4単位の波状口縁全部に獣面が付いて出土する例は少ない。大概の場合深鉢からもぎ取られたような形で出土している。

中野谷松原遺跡の土壌墓からは、浅鉢を副葬品とする土壌墓の他に、頭部に鉢を被せる「鉢被り」と考えられる形態の土器が出土している。この鉢被りに使用された土器は、諸磯b式土器の一般的な深鉢であるが、あえて獣面土器を使用したものではない。浅鉢が、廃屋儀礼や葬送儀礼の時に威信財として使われる物語性を持つ土器であるのに反して、獣面土器の出土状況は、一般的な深鉢土器と同じように出土している。獣面土器は、遺構の覆土中に他の土器と混じり破片として出土したり、遺構外からひょっこり顔を出す場合もある。総体として、獣面土器は、他の深鉢と同じように遺構の覆土中に廃棄された状況が多い。今回調べた遺跡の中では、獣面土器が特別な形で出土している例は、みられなかった。ただ、獣面部分だけが単独で出土したり、深鉢の獣面部分が欠けている例がみられることから、深鉢から故意に獣面をもぎ取ったような形で廃棄された可能性も視野に入れない。獣面の付いた深鉢は、その役割を終えたとき、深鉢から獣面が破がされて廃棄された状態で出土しているとは、考えられないだろうか。

獣面土器の大部分の出土状態は、住居址覆土中や遺構外から散発的に出土していることが多い。そのため、出土状況から獣面土器の性格を探ることは難しいことである。それに対して、浅鉢は、糸井宮前遺跡、中野谷松原遺跡、木戸先遺跡のように住居址覆土中に破片で出土することも多いのであるが、住居址床面から単独或いは、石皿等と共伴して出土する例や土壌の副葬品として使われている。

また、土壌内に副葬されるなど葬送儀礼に使用されたような出土状況を示す例もある。浅鉢は、本来の器としての役目とは別な面で、用途を考えさせるような特異な出方をしており、獣面土器と対極的な出土傾向を示す。

以上のような出土状況から浅鉢は、葬送儀礼や廃屋儀礼等の何らかの祭式儀礼に使われたもので安置され、浅鉢の形が壊されない土器。それに対して、獣面土器は容器として存在し、目的が終わると壊され廃棄される土器として、二者を対比してみることが出来るのではないだろうか。



表1 土器数量表

群馬	遺跡名		中野谷松原		
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
	0	0	39	0	0
13住	0	0	49	0	0
15住	0	0	17	0	0
21住	0	0	12	0	0
23住	1	1	17	5.882	5.882
26住	3	0	33	9.091	0
29住	0	1	1	0	100
30住	0	0	1	0	0
33住	0	0	42	0	0
34住	0	0	2	0	0
40住	2	0	37	5.405	0
41住	2	2	23	8.696	8.696
47住	1	0	2	50	0
51住	0	0	2	0	0
55住	0	0	21	0	0
56住	8	17	152	5.263	11.184
57住	1	0	22	4.545	0
62住	2	0	15	13.333	0
63住	0	0	1	0	0
64住	0	3	25	0	12
66住	18	5	91	19.78	5.495
67住	0	0	3	0	0
68住	2	5	52	3.846	9.615
69住	1	2	18	5.556	11.111
70住	1	4	15	6.667	26.667
75住	0	0	8	0	0
78住	2	6	153	1.307	3.922
79住	1	4	49	2.041	8.163
80住	28	20	144	19.444	13.889
81住	0	0	4	0	0
82住	0	0	3	0	0
83住	3	2	23	13.043	8.696
84住	3	0	21	14.286	0
85住	0	3	52	0	5.769
86住	1	0	65	1.538	0
87住	0	0	8	0	0
91住	0	2	23	0	8.696
94住	0	0	2	0	0
105住	0	0	5	0	0
106住	0	0	17	0	0
108住	0	0	4	0	0
111住	0	4	93	0	4.301
113住	0	3	23	0	13.043
115住	0	2	29	0	6.897
116住	2	1	47	4.255	2.128
118住	0	0	9	0	0
119住	2	1	29	6.897	3.448
120住	0	1	9	0	11.111
土壙	7	20	492	1.423	4.065
遺構外	31	0	62	50	0
合 計	122	109	2066	5.905	5.276

千葉県	遺跡名		木戸先		
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
5号住	0	0	65	0	0
6号住	3	0	39	7.692	0
7・8号住	6	12	400	1.5	3
包含層	11	98	381	2.887	25.722
合 計	20	110	885	2.26	12.429

長野	遺跡名		お供平		
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
1号住	2	8	47	4.255	17.021
2号住	0	0	15	0	0
3号住	1	0	14	7.143	0
4号住	0	1	10	0	10
遺構外	0	17	64	0	26.563
11号住	0	2	7	0	28.571
12号住	0	3	88	0	3.409
19号住	2	0	19	10.526	0
23号住	0	4	18	0	22.222
土壙・遺構外	3	14	146	2.055	9.589
合 計	8	49	428	1.869	11.449

群馬	遺跡名		神保植松		
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
26号住	8	11	644	1.242	1.708
27号住	0	0	45	0	0
28号住	1	0	128	0.781	0
35号住	1	0	32	3.125	0
土壙	4	3	237	1.688	1.266
遺構外	56	59	1845	3.035	3.198
合 計	70	73	2931	2.388	2.491

埼玉	遺跡名		塚屋		
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
2号住	0	0	28	0	0
3号住	0	0	29	0	0
4号住	0	0	97	0	0
5号住	0	7	229	0	3.057
8号住	0	3	140	0	2.143
17号住	0	2	61	0	3.279
19号住	0	0	35	0	0
20号住	0	2	327	0	0.612
21号住	2	3	126	1.587	2.381
24号住	1	3	83	1.205	3.614
4号土壙	4	0	8	50	0
15号土壙	0	2	39	0	5.128
65号土壙	1	0	16	6.25	0
グリッド	0	16	16	0	100
合 計	8	38	1234	0.648	3.079

東京	遺跡名		四葉地区遺跡		
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
遺構外	1	5	77	1.299	6.494
1号住	17	59	749	2.27	7.877
2号住	0	13	193	0	6.736



3号住	0	7	101	0	6.931
4号住	0	0	15	0	0
5号住	0	0	8	0	0
6号住	0	1	13	0	7.692
7号住	0	0	17	0	0
8号住	0	0	12	0	0
9号住	0	0	8	0	0
10・11号住	1	8	52	1.923	15.385
合 計	19	93	1245	1.526	7.47

千葉 遺跡名 花前 I					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
7	1	0	46	2.174	0
21	1	1	37	2.703	2.703
遺構外	4	12	58	6.897	20.69
合 計	6	13	99	6.061	13.131

神奈川 遺跡名 細田					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
5号住	1	1	198	0.505	0.505
7号住	1	0	20	5	0
9号住	2	5	205	0.976	2.439
10号住	0	0	74	0	0

遺構外	5	8	654	0.765	1.223
合 計	8	13	953	0.839	1.364

山梨 遺跡名 天神					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
3号住	0	1	6	0	16.667
4号住	0	4	11	0	36.364
11住	0	0	3	0	0
12住	0	0	5	0	0
18住	0	0	6	0	0
19住	0	1	8	0	12.5
21住	0	2	4	0	50
23住	0	1	5	0	20
25住	2	4	21	9.524	19.048
40住	0	3	13	0	23.077
合 計	2	16	82	2.439	19.512

岐阜 遺跡名 落合五郎					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
遺構外	2	15	327	0.612	4.587
2部遺構外	0	16	411	0	3.893
合 計	2	31	738	0.271	4.201

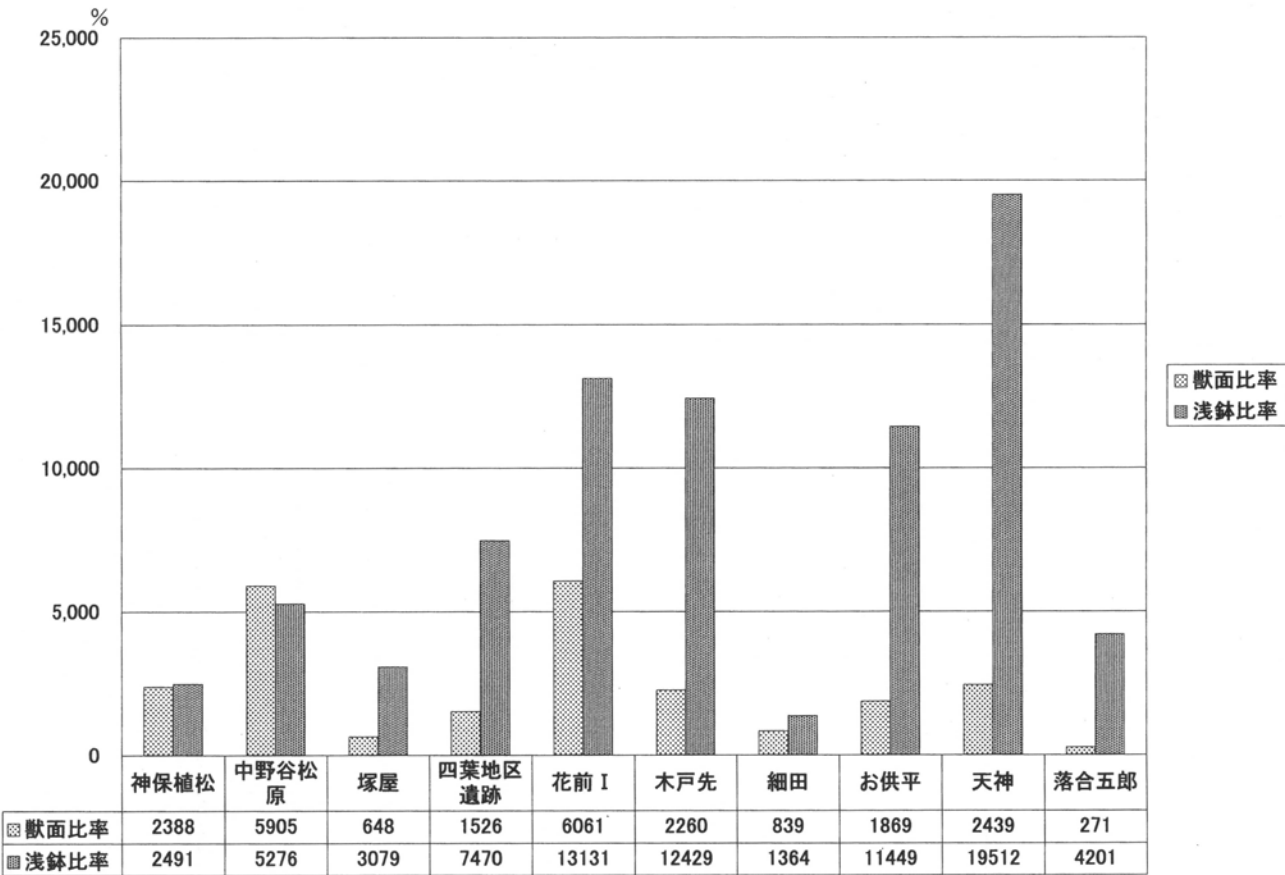


図3 獣面土器と浅鉢の比較

#### 4. まとめ

浅鉢が儀礼の場面で威信財として使用されたのにたいして、イノシシという具象的な装飾を持つ土器は、日常の非儀礼的な場面で使用された土器としてとらえた。では、イノシシ顔の持つ意味はどこにあるのだろうか。手がかりは、先に挙げた変遷と分布、各遺跡からの数量比である。

獣面土器の変遷については、1類から6類に獣面が変遷したかのように見える。実際、獣面が貼付されている土器をみると大まかには、1類から5類へと移行するのであるが、6類の粘土瘤の貼付は、諸磯bの中段階にみられる手法である。ある完成された形のものの変遷する場合、順を追って変遷するように見えるが、イノシシ顔の突起の場合必ずしもそうではない。口縁部を4単位に区画し、諸磯b 2段階に1類としたイノシシ顔の突起が付けられる。それが6類に順を追って変遷せずに、諸磯b 4段階には、6類のような粘土瘤が付けられた土器が他のイノシシ顔と共に出現する。

獣面土器の分布域は、諸磯b式土器圏を中心として、その外側に広がり現在のところ浅鉢の分布域より内側である。この分布域の中で獣面土器の出土数をみると、群馬西部の神保植松遺跡、中野谷松原遺跡では、獣面土器の出土数が他地域の遺跡より圧倒的に多い。また、浅鉢との比率をみてもほぼ同じ比率なのは、この二遺跡である。このことは、獣面土器の発生、使われ方に何らかの形でこの地域が関与していると考えてよいのではないだろうか。獣面土器は、広範囲に広がることから、浅鉢と同じように交易や流過程において何らかの役割を持った土器ではないかと考える。しかし、獣面土器は、他の深鉢と同じように覆土中に廃棄される例が多いことなどから、浅鉢ほど儀礼につかわれる威信財としての位置づけを持たない土器である。

以上のことから、獣面土器は群馬西部地域に多くみられる土器で、浅鉢ほど儀礼に使われる土器ではないが、広範囲に分布する土器であるといえる。

大工原（2002）氏は、縄文前期の黒曜石の流通システムを3段階に分け、諸磯b式期を一つの変換点として捉え、交換のシステムを次のように述べている。

「黒曜石流通の第2段階では、原産地地域に拠点集落が形成され、表層採掘を行っていたと推定される。流通量が大幅に増加したことにより、連鎖交換を超えたレベルで黒曜石が流通したと考えられる。群馬の場合、西毛地域に遠隔地拠点集落と呼ぶ交易を司る集落が成立する。ここに居住していた交易集団は、群馬県地域の一般的な集落を対象として初源的な交易活動を行っていたと推定される。この段階の交易は、拠点集落と行った場所へ出向く形で行われていたと推定される。」

黒曜石流通システムの第2段階に、群馬西部では1類

のイノシシ土器は成立する。諸磯b式土器古段階である。そして、黒曜石流通システムの2段階は、諸磯b式土器の古段階から中段階に存在した。それは、1類から3類とした獣面土器の存在する期間にほぼ相当する。黒曜石の交易に関連して、イノシシ土器を持った群馬の集団が、長野の黒曜石を持った拠点集落に出かけ交易を行った結果、イノシシ土器が広がったとは考えられないだろうか。

イノシシ土器の出土量をみると、群馬西部の各遺跡に多くみられ、黒曜石原産地周辺では少ない。猪の分布は、森林地帯に多く、積雪30cm以上で積雪日数70を超えところでは、生息していないという報告がある。縄文時代前期に長野県の黒曜石産地周辺の高山や積雪の多い地域では、猪の生息数が少なく、群馬西部に猪が多くみられる状況であったのではないだろうか。そのため、黒曜石交易に際して、中野谷松原遺跡周辺の集団であることを証明するためにイノシシ顔の突起が付けられた土器が使われたのではないだろうか。

存在証明 (identity) としての威信財 (prestige goods) としてイノシシ土器が作られ、交易に使用されのではな

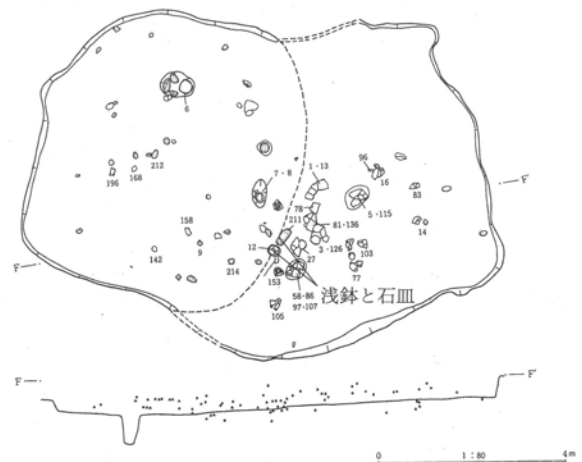


図4 糸井宮前遺跡浅鉢出土図

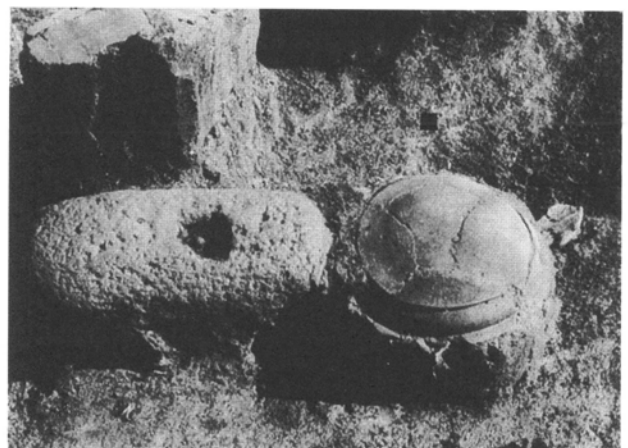


写真1 糸井宮前遺跡浅鉢出土状況  
浅鉢と石皿が供伴している。



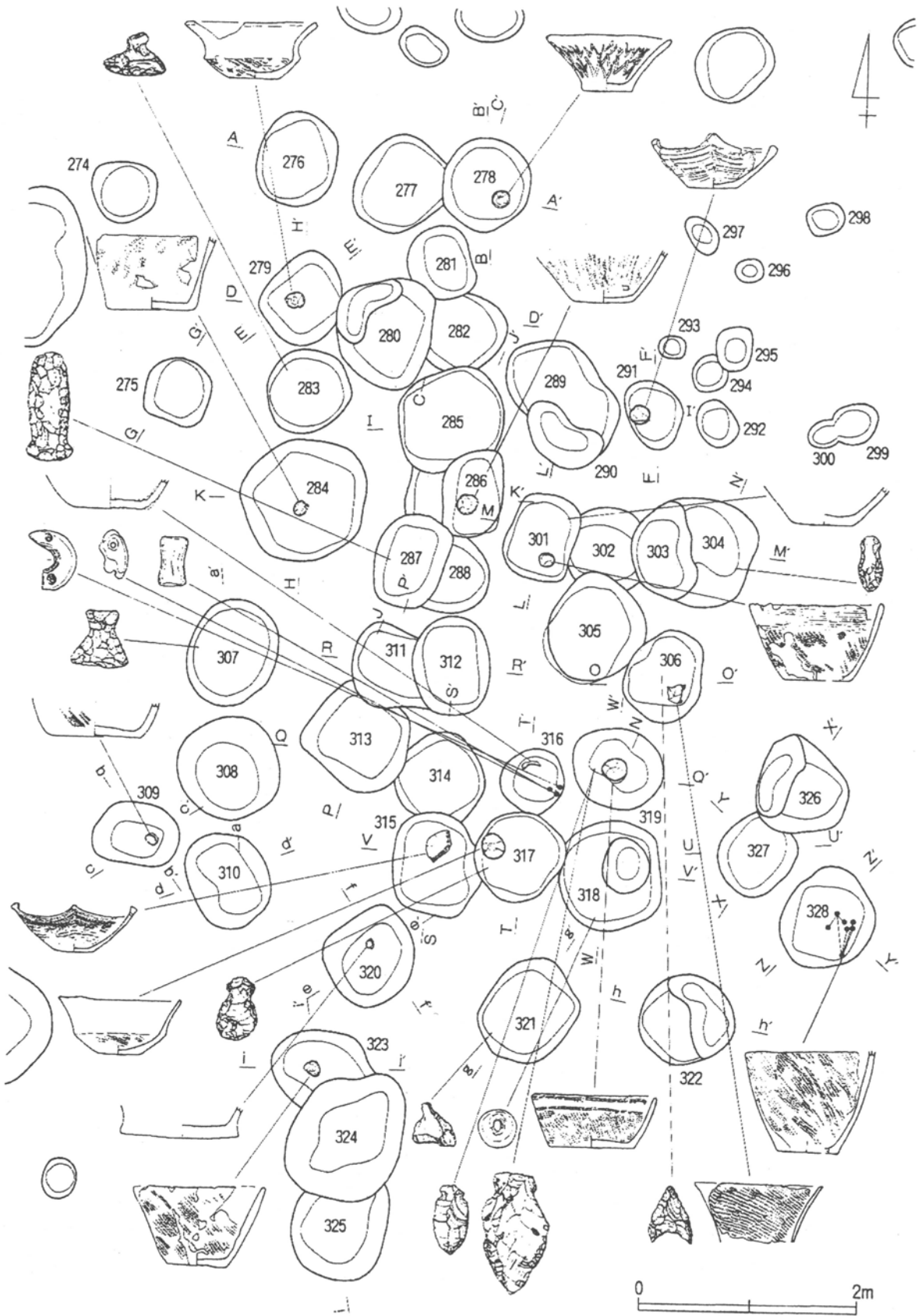


図6 木戸先遺跡浅鉢出土図  
威信財として土壌に埋納されている浅鉢の例。

#### 図版引用文献

- 伊勢塚・東光寺裏上越新幹線埋蔵文化財調査報告書IV 埼玉県教育委員会 1980 埼玉県遺跡発掘調査報告書報告書26集
- 細田遺跡 神奈川県教育委員会 1981 神奈川県埋蔵文化財調査報告23
- お供平遺跡Ⅰ 長野県信州新町教育委員会 1982 信州新町町民運動広場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
- 塚屋・北塚屋 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書25集 一般国道140号埋蔵文化財発掘調査報告塚屋・北塚屋
- 稲荷丸北遺跡 ニューサイエンス社 1983 稲荷丸北遺跡調査団編 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 千葉県文化財センター 1984
- 糸井宮前遺跡Ⅱ 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 落合五郎遺跡発掘調査報告書 中津川市教育委員会 1988
- 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅸ 千葉県文化財センター 1989 千葉県文化財センター調査報告164集
- お供平遺跡Ⅱ 長野県信州新町教育委員会 1989 長野県犀峠高等学校グラウンド造成に伴う埋蔵文化財調査報告書
- 愛宕山遺跡・初室古墳・愛宕遺跡・日向遺跡 群馬県勢多郡富士見村教育委員会 1994 平成2年度県営圃場整備事業富士見地区に伴う埋蔵文化財調査報告書
- 木戸先遺跡 印旛郡市文化財センター 1994 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書79集
- 天神遺跡 山梨県教育委員会 1994 山梨県埋蔵文化財センター調査報告97集
- 神保植松遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 関越自動車道（上越線）埋蔵文化財発掘調査報告書41
- 四葉地区遺跡 板橋区四葉遺跡調査会・東京都建設局 1997 平成9年度縄文時代編
- 川白田遺跡 川白田遺跡調査会 1998
- 中野谷松原 中野谷松原遺跡 安中市教育委員会 1998
- 七社神社前遺跡Ⅱ 東京都北区教育委員会 1998 北区埋蔵文化財調査報告第24集
- 中山間地総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書H、8～H、12年度 長野県木曽地方事務所、大桑村教育委員会、木曽広域連合 2002

#### 参考文献

- 関根慎二 群馬県における諸磯b式土器の細分 第12回縄文セミナー「前期後半の再検討」記録集 1989 縄文セミナーの会
- 林 克彦 顔と器—縄文時代晩期の「顔つき土器」について— 青山史学 18 2000 青山学院大学史学研究
- 関根慎二 諸磯式獣面付き土器考 赤城村歴史資料館紀要第3集 2001 赤城村教育委員会
- 大工原 豊 縄文人の交流 展示レポート6 縄文土器が語る群馬の風土 2002 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大工原 豊 黒曜石の流通をめぐる社会—前期の関東・中部地域—縄文社会論（上） 2002 同成社
- 大工原 豊 ストーンロード—縄文時代の黒曜石交易— 2003 安中市ふるさと学習館
- 小杉 康 縄文のマツリと暮らし 岩波書店 2003 先史日本を復元する3
- 小野正文 物語性文様について 土器から探る縄文社会 2002 山梨県考古学協会
- 新津 健 イノシンのまつり—縄文・弥生そして今— 新世紀の考古学 2003 大塚初重先生喜寿記念論文集
- 新津 健 上の平遺跡出土の動物装飾付き土器とその周辺 研究紀要19 2003 山梨県立博物館・山梨県埋蔵文化財センター

※図2の地図はカンミール3D（杉本智彦氏制作ソフト）使用。